

## 倉橋 由美子(1935～2005) 小説家

高知県生まれ。土佐高等学校卒業後、明治大学文学部に入学。1960年、在学中に発表した短編小説『バルタイ』が明大新聞「第4回学長賞」を受賞。平野謙の文芸時評欄でとりあげられ、有望な新人作家として注目される。1961年に女流文学賞、1963年に田村俊子賞を受賞。1966年より米国のアイオワ州立大学に留学。帰国後、1969年に『スマキストQの冒険』を刊行し、話題となる。1983年『アマノン国往還記』（泉鏡花文学賞）、1984年『大人のための残酷童話』はロングセラーとなる。また、シェル・シルヴァスタイン『ぼくを探しに』、サンテグジュペリ『新訳星の王子さま』など翻訳も多く手がけた。現在も、国内外から高い評価を集めている。2006年、本学より特別功労賞を授与。

## 阿久 悠(1937～2007) 作詞家・作家

兵庫県淡路島生まれ。明治大学文学部卒業。広告代理店勤務を経て、放送作家・作詞家として活動を本格化させ、「また逢う日まで」「勝手にしやがれ」「UFO」など数々のヒット曲を発表する。手掛けた5000曲以上にも及ぶその歌の世界は、アイドルから演歌、POPS、アニメ主題歌と多岐に渡り、世代を超えて日本人の心を捉え続け、「日本レコード大賞」「日本歌謡大賞」「日本作詩大賞」「古賀政男記念音楽大賞」などの賞を多数受賞。企画、審査員として携わったテレビ番組「スター誕生」では、森昌子、桜田淳子、山口百恵、小泉今日子など、多数のトップスターを輩出した。また、小説家としても活躍し、『瀬戸内少年野球団』は直木賞候補作となり、映画化もされた。1997年、第45回菊池寛賞受賞。1999年、紫綬褒章受章。

## 菅 啓次郎 理工学部教授・詩人・翻訳者

1958年生まれ。ワシントン大学（シアトル）博士課程中退。明治大学大学院理工学研究科新領域創造専攻デジタルコンテンツ系教授。「コンテンツ批評」と「映像文化論」を担当。現代世界文学、アメリカ先住民文化、翻訳論、トラヴェル・ライティングといった様々な分野の研究・翻訳を行っている。著書に『コロンブスの犬』『狼が連れだって走る月』『トロピカル・ゴシップ』『コヨーテ読書』『オムニフォン』『ホノルル、ブラジル』『本は読めないものだから心配するな』『斜線の旅』が、主な翻訳にリオタール『こどもたちに語るポストモダン』、マトゥラーナとバレーラ『知恵の樹』、ラプージュ『赤道地帯』、コンデ『生命の樹』、グリッサン『関係』の詩学、アジェンデ『パウラ』、ベンダー『わがままなやつら』などがある。

## 中村 和恵 法学部教授・著作者(詩・エッセイ・論文・紀行・小説など)

1966年生まれ、札幌出身。東京大学大学院比較文学比較文化博士課程中退。シドニー大学、成城大学等を経て現在、明治大学法学部及び同大学院教養デザイン研究科で主に比較文化論を教える。ソ連時代のモスクワや難民の多いメルボルン西部で過ごした十代の経験から、異なる民との接触／衝突を個人的で日常的なこととして考え始め、カリブ海などの英語圏文学や近代日本文学を読み、書き、考えてきた。合衆国や豪州でも教鞭をとり、先住民居留地の人々に話を聞き、短編小説（第一回新潮学生小説コンクール受賞）をきっかけに、詩、随筆、紀行文、研究論文、お喋り、歴史記述と、ジャンルの垣根をいわば忘れて書く試みをつづけている。詩集『トカゲのラザロ』、エッセイ集『キミハドコニイルノ』『降ります』『地上の飯』、共著論集『世界中のアフリカに行こう』、翻訳書にアール・ラヴレイス『ドラゴンは踊れない』。

## 越川 芳明 文学部教授・翻訳家・著述家

1952年千葉県生まれ。サンディエゴ州立大学客員教授（1998-99年）。専門は、アメリカ文学。筑波大学博士課程文芸・言語研究科中退。幼い頃は、敗戦後貧しいが、しかし子どもの数だけはやたら多い日本に生まれたごく普通の少年の例にもれず、明けても暮れても近所の悪ガキどもと野球三昧。夢は、斎藤監督率いる銚子商業高校に入り、甲子園に行くことだった。その夢は実現できなかったが、いまはメジャー・リーグのスプリング・キャンプ地や、野外調査先のキューバで、バットとボールの代わりにペンとノートを手にして試合を見てまわり、新たな夢を抱く。著書に、『ギターを抱いた渡り鳥 チカーノ詩礼賛』（思潮社）、『トウガラシのちいさな旅 ボーダー文化論』（白水社）、『アメリカの彼方へ ピンチオン以降の現代アメリカ文学』（自由国民社）。訳書に、エリクソン『エクスタシーの湖』（筑摩書房）、クーヴァー『ジェラルドのパーティ』（講談社）、ほか多数。

## 飯田 久彦 歌手・プロデューサー

1941年生まれ、東京都出身。日本大学高等学校卒業後、芝浦工業大学工学部電子工学科中退。ビクターエンタテインメント専務取締役、テイチクエンタテインメント社長、会長就任を経て、現在、エイバックス・エンタテインメント顧問。歌手時代の愛称はチャコ。「ルイジアナ・ママ」が大ヒットし、NHK紅白歌合戦に出場。その後、日本ビクター（現ビクターエンタテインメント）に入社し、ディレクターとして松崎しげる、桜田淳子、岩崎宏美、ピンク・レディーらを担当。阿久悠作詞、都倉俊一作曲、ピンク・レディー歌唱によるレコード大賞受賞曲「UFO」の担当ディレクター。小泉今日子、SMAPらのプロデューサーとしても活動。サザンオールスターズの代表曲「チャコの海岸物語」の“チャコ”とは、同氏のニックネームを桑田佳祐が歌詞にしたものである。